



正装の松平頼壽伯爵



坪内逍遙 (国会図書館蔵)

坪内 逍遙

PROFILE

小説家、劇作家、評論家、翻訳家、教育家／安政6(1859)年、美濃国太田村(現在の岐阜県美濃加茂市)生まれ。東京大学卒業後、東京専門学校(現早稲田大学)講師を経て教授。日本最初の近代的文学論『小説真髓』と、その実践となる小説『当世書生気質』を著し、写実主義を提唱した。明治23(1890)年には東京専門学校に文学科を創設し、翌年には『早稲田文学』を創刊。演劇運動にも尽力し、戯曲や舞踊劇を創作。文芸協会を組織し、早稲田大学演劇博物館の建設やシェイクスピア全作品の完訳など、日本の近代文学や演劇の発展に大きな功績を残した。昭和4(1929)年には本郷中学校の校歌を作詞している。昭和10(1935)年没。



坪内 ミキ子さん

PROFILE

女優／昭和15(1940)年生まれ。早稲田大学文学部英文科卒業。大叔父は文学者で東京専門学校(現早稲田大学)文学科の創設者でもある坪内逍遙、父は演劇評論家で早稲田大学教授などを歴任した坪内土行、母は宝塚歌劇団一期生の操。大学在学中の昭和37(1962)年に映画『陽気な殿様』で女優デビュー。映画、テレビドラマ、ワイドショーなど幅広いジャンルで活躍。主な出演作に、映画『座頭市』シリーズ、テレビドラマ『いじわるばあさん』『太閤記』『瀧美清の泣いてたまるか』『竜馬がゆく』、情報・バラエティ番組『連想ゲーム』『3時のあなた』など。著書に、母との介護生活を綴った『母の介護 102歳で看取るまで』(新潮社)がある。

濱口 久仁子さん

PROFILE

早稲田大学演劇博物館招聘研究員／早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了(演劇専攻)。邦楽舞踊の評論などを執筆。元財団法人逍遙協会事務局長。立教大学、拓殖大学、文京学院大学非常勤講師。歌舞伎イヤホンガイド解説者。共著に『歌舞伎 家・人・芸』(淡交社)、『ショウ・ステージの時代』(森話社)など。



〈特別企画〉Part.2 松平頼壽と坪内逍遙

校歌誕生の経緯

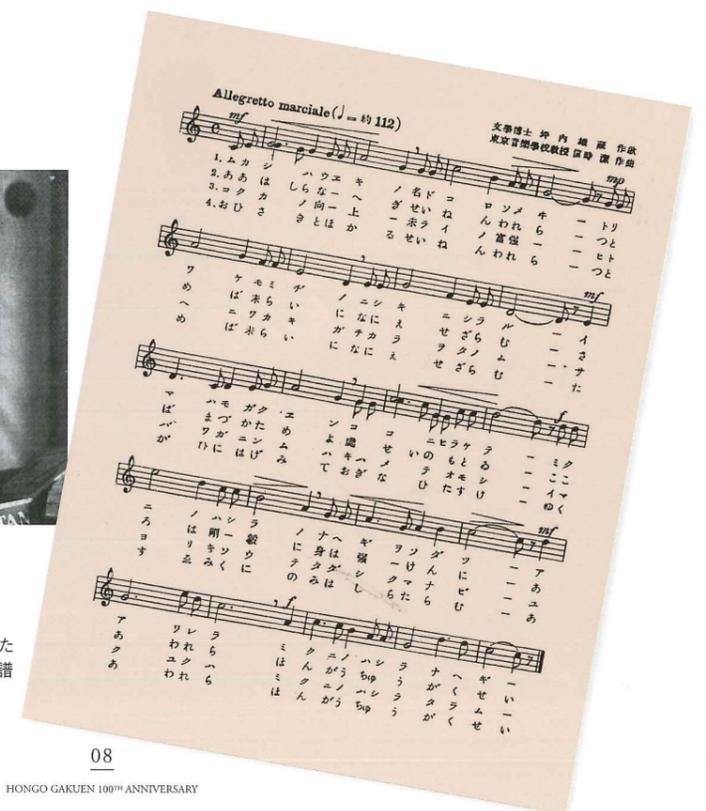
女優 坪内 ミキ子さん × 名誉理事長 松平 頼武 × 理事長 松平 頼昌 × 早稲田大学演劇博物館招聘研究員 濱口 久仁子さん



左から松平頼昌理事長、坪内ミキ子さん、松平頼武名誉理事長



作曲家 信時潔



1929年に制定された
当時の楽譜



縁の深さが窺い知れる
校歌誕生の経緯

理事長 本日は、私たちが誇りにしております坪内逍遙先生作詞の校歌や、坪内逍遙先生と本学創立者の松平頼壽公とのつながりについてお話を伺いたく、逍遙先生のご令孫であるミキ子さんをお招きできたことを光栄に思っております。

坪内 この度は、創立100周年おめでとうございます。また、お招きいただきありがとうございます。

理事長 我々の記録を見ると、昭和4(1929)年に制定された校歌は、頼壽公が逍遙先生に書いていただきたいと申し出たとありますが、二人がいつ出会い、どんな関係性があったのかは明らかでないところが多くあります。まずは逍遙先生の研究をされている濱口さんから、校歌が生まれた経緯をご説明いただけますか。

濱口 『逍遙日記』という手控帳に「松平頼壽伯の依頼もだしがたく、咄嗟に本郷中学校の校歌を作る」と記載があります。「もだしがたく」とは、そむくわけにはいかないという意味ですね。しかも「咄嗟に」と続きますから、依頼があっただけでなく、すぐ作詞に取り掛かったのでしょう。



松平頼壽先生とお孫さん
(左奥は松平頼武名誉理事長)

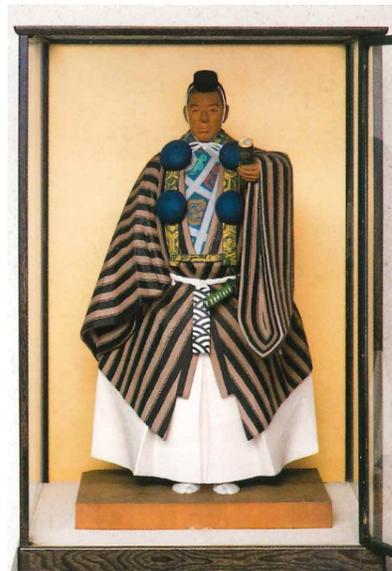
逍遙先生が生涯で校歌を作ったのは、早稲田中学校と本郷中学校だけです。この一文だけを読んでも、頼壽公とご縁の深さが窺い知れる気がします。

坪内 逍遙と頼壽公は、お能を通じてつながっていたそうですね。

濱口 逍遙先生は文学者としてさまざまな分野に手を伸ばした先駆者で、新しい時代になって日本舞踊や歌舞伎がどうなっていくのか、関心を持っていました。お能に関しても多くの文章を残していて、『能楽』という雑誌への寄稿も多く、非常に心を寄せていたと思います。

名誉理事長 私の祖父(頼壽公)は宝生流で舞もやっています。宝生会の資料には逍遙先生と祖父の名前が記録としてかなり残っているそうです。能楽に大変熱心で、徳川家や酒井家が集まる十徳会という謡講の会にも参加していました。祖父と逍遙先生との関わりについては、祖父がなぜ早稲田(旧東京専門学校)に入学したのかをたどると、手がかりがあるのではないかと考えています。というのも、中野武管という高松藩の武家のお孫で、宝生流で大変な名を残されている方が祖父の後見人だったそうで、祖父が学習院高等科から早稲田に進んだ理由も、彼の勧めがあったからではないか。中野武管は明治14年の政変後は大隈重信侯が結成した立憲改進黨に参画し、のちに衆議院議員も務められました。おそらくそうしたご縁から祖父と逍遙先生がつながって、祖父は文学科ではなく法律科でしたが、何かの授業で教えを受けていたのではないかと想像しています。

坪内 今と違って当時は他学部の学生でも聴講できたし、先生と学生の関係性も密でしょうからね。逍遙の講義の時は、教室の窓に



弁慶姿の松平頼壽像(宝生能楽堂所蔵)

学生たちが鈴なりに顔を並べていたという話を聞いたことがあります。頼壽公もご興味を持ってらしたのかも。

濱口 逍遙先生は教育熱心ですね。教え子の面倒見が良くて、後々まで物心両面から援助をしていた。

坪内 『國語讀本』も作りましたし。ただ、7歳で養子に入った私の父(士行)は“被害者”なんです(笑)。食事は一汁一菜、1週間にお魚が出るのは1度か2度で、せんべい布団で書生さんと同じように寝かされていた。外に私財を投げ打たないといけませんから、身内、特に男の子には厳しかったのだと思います。養女を迎えた飯塚くにさんはおいしいものを食べて、着飾っていたと聞いているんですけ

ど(笑)。教育者として熱意があったから、頼壽公が学校を創立されると聞いて、応援したかったのでしょう。

英語講師時代に
接点があった?

理事長 教員からの質問で、逍遙先生が東京開成学校(後の東京大学)の学生だった明治14(1881)年頃から明治20(1887)年まで、学費と生活費を稼ぐために進文学舎(後に進文学社)という私塾で英語の先生をしていたという記録があるそうです。進文学舎は本郷元町の高松藩下屋敷にあった藩校玉藻学校の後身で、その時点から何かつながりがあったのではないかと話なのですが。

名誉理事長 それは初めて聞いただけで、今の水道橋、東京工芸高校のあたりに祖父の本邸があって、香川県の教育会長を務めていましたから、関連があったのかもしれない。

濱口 教えていた時期は頼壽公が学生になるずっと前ですから、その時点で直接的なつながりはなかったかもしれませんが、いずれにしても今後の課題になりそうですね。校歌にも「咄嗟に作った」と言っているものの、「むかしは植樹の名どころ染井」「とりわけ紅葉の錦に知らる」と、染井の土地柄がしっかり織り込まれていますし。

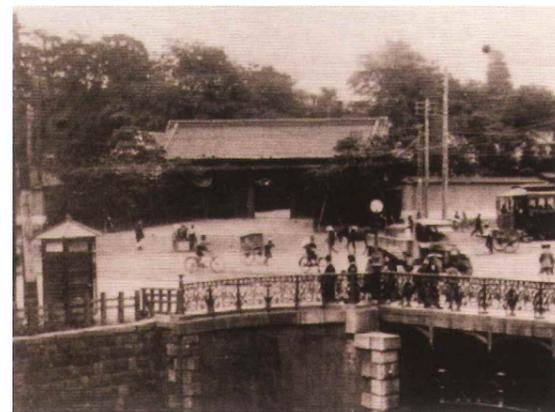
坪内 逍遙が学生の頃、頼壽公はおいくつくらいですか?

名誉理事長 祖父が生まれたのは明治7(1874)年ですから、15歳は離れているでしょうね。

坪内 となると、頼壽公とご縁がいつから始まったのかはわかりませんね……。

名誉理事長 その私塾で英語教師を始められた頃、祖父は8歳くらいですからね。やはり、先ほどお話しした中野武管が縁を取り持ったのではないかな。政治家、実業家として大隈侯とつながりがあつたし、渋沢栄一とも関係が深く、彼の後任として第二代東京商工会議所の会頭にもなりました。先日、早稲田大学の田中愛治総長のもとに何って、大正6(1917)年に起きた早稲田騒動に関する資料を提供いただきました。天野為之学長の後任をめぐる教職員や学生を巻き込んだ紛争で、当時、貴族院議員だった祖父は高田早苗先生や逍遙先生を支持し、中野武管や渋沢栄一らが騒動の収拾にあたっています。騒動の収束後、祖父は功労者として維持員にも選出されています。

坪内 それにしても、学校を創立された頼壽公のご意志は素晴らしいですね。当時は教育制度が変わって、中学校の入学難が問題になっていたわけですよね。



水道橋の松平伯爵家本邸(松平公益会蔵)

名誉理事長 祖父は本郷区(当時)の教育会長を務めていて、中学校の数が足りないことから、本郷中学校の設立が決定されました。区民の方々からの寄付の申し込みも多くいただいたそうですが、区内には祖父が思い描くような学校作りに適した土地がなかった。そこで、当時祖父の母が住んでいた染井の別邸の一部に建てることになったのです。「本郷学園と言いながら本郷にないね」とよく言われますが(笑)、そういう経緯がありました。

坪内 本郷区の方が後ろ盾になってくださったことを忘れないように「本郷」と名付けたんですね。国の財産である子どもたちを育てることが教育ですから、非常に素晴らしいことだと思います。(了)

